

# 第10回 新潟フランス語 スピーチコンテスト



フランスが好きなあなた  
フランス語を勉強しているあなた  
スピーチコンテストに挑戦してみませんか？

## 日程 会場

2019年1月26日(土) 午後1時～4時30分(予定)

新潟大学中央図書館ライブラリーホール(新潟大学五十嵐キャンパス内)

※コンテスト終了後、同会場にて交流会を開催します。(30分～1時間程度)

## 部門

★初級(仏検4～5級程度) 2人1組 テキスト暗誦

★中級(仏検3～4級程度) テキストの暗誦と質疑応答

★フリースピーチ(仏検3級以上程度) 3分以上4分以内と質疑応答

テーマは自由、自作・未発表のものに限り、引き写し、転用は禁止します。



## 参加 資格

★フランス語を母語としない方ならどなたでも参加できます。

ただし、次の項目に該当する方は、出場はできません。

① フランス語に携わる仕事をしている方(過去に仕事をしていた方も不可)

② 父母のどちらかの母語がフランス語の場合

③ 初級はフランス語圏滞在経験が3か月以上の方

④ 中級はフランス語圏滞在経験が6か月以上の方

⑤ 過去に日本国内での全国フランス語コンクール入賞(3位以上)の経験がある。

⑥ 本コンテスト各応募部門の過去の優勝者



## 審査 基準

★初級・中級… 正確さ、イントネーション・発音、聴衆へのアピール

★フリースピーチ… 創造性、論理的、明晰さ、メッセージ性

※各部門の優秀者を表彰します。



## 応募方法 締切り

★応募方法 所定の申込書に必要事項を記入し、事務局へ提出。

フリースピーチの方は、原稿も一緒にご提出ください。

★締切り 2019年1月7日(月) 必着

主催：新潟フランス語スピーチコンテスト実行委員会 実行委員長 逸見 龍生(新潟大学人文学部教授)  
[構成団体] 新潟大学人文学部(代表：逸見龍生教授)、新潟大学フランス学研究会、新潟・フランス協会、  
新潟大学フランス語圏留学生、新潟市在住フランス人(公財)新潟市国際交流協会  
後援：新潟市、ナント市、フランス大使館 協力：新潟コンピュータ専門学校

【締切り：2019年1月7日（月）必着】

第10回 新潟フランス語スピーチコンテスト 参加申込書

申込日：(西暦) 年 月 日

☆記述また該当するものにチェックを入れ、郵送かファクシミリまたは電子メールで申込み先までお送りください

① ふりがな氏名		② 性別	<input type="checkbox"/> 男・ <input type="checkbox"/> 女
③ 生年月日	(西暦) 年 月 日 (満 歳)		
④ 連絡先 (住所、電話、 メールアドレス)	〒 _____ 電話(昼間連絡先): _____ メールアドレス: _____@_____		
⑤ 学校・サークル名	学 生	在 学 校 名 : _____ 学 年 : _____	
	一 般	※所属フランス語学習サークル等があれば名称を記入	
⑥ 参加部門 (参加資格に注意ください)	<input type="checkbox"/> 初 級 ・ <input type="checkbox"/> 中 級 ・ <input type="checkbox"/> フリースピーチ		
⑦ フランス語学習歴  (フランス語圏への留学 または滞在経験のある 方は、その長短に関わら ず必ず期間もご記入く ださい。参加資格に注意 ください)	学習・留学・滞在歴(2019年1月26日現在)		
	_____年 月 ~ _____年 月 場所: _____		
	_____年 月 ~ _____年 月 場所: _____		
	_____年 月 ~ _____年 月 場所: _____		
	フランス語検定 _____ 級 ※お持ち方のみ		
	その他: _____		
⑧ スピーチタイトル (フリースピーチの方のみ)			
⑨ アンケート	本スピーチコンテストの開催を何で知りましたか。 <input type="checkbox"/> ホームページ <input type="checkbox"/> 募集チラシ <input type="checkbox"/> 市報にいがた <input type="checkbox"/> 学校 <input type="checkbox"/> 知人等 <input type="checkbox"/> その他( _____ )		
⑩ 申込み 問い合わせ先	新潟フランス語スピーチコンテスト実行委員会 事務局 〒951-8055 新潟市中央区礎町通3ノ町2086番地 (公財)新潟市国際交流協会 内 電話: 025-225-2727/ Fax: 025-225-2733/ E-mail: kyokai@nief.or.jp		
⑪ そ の 他	(1) ご記入いただいた事項は、コンテストの開催に係る目的だけに使用します。 (2) 参加申込書は返却しません。		

## 【中級】暗誦テキスト

Colette, *La Maison de Claudine* [1922] ; *Œuvres complètes de Colette*, t. 6, Paris, Flammarion, 1973, p. 35.

参考 : Nicole Blondeau, Ferroudja Allouache et Marie-Françoise Né, *Littérature progressive du Français – Niveau intermédiaire*, Paris, CLE International.

Le mot « presbytère » venait de tomber, cette année-là, dans mon oreille sensible, et d'y faire des ravages.

« C'est vraiment le presbytère le plus gai que je connaisse... », avait dit quelqu'un.

Loin de moi l'idée de demander à l'un de mes parents : « Qu'est-ce que c'est, un presbytère ? » J'avais recueilli en moi le mot mystérieux, comme brodé d'un relief rêche en son commencement, achevé en une longue et rêveuse syllabe... Enrichie d'un secret et d'un doute, je dormais avec le mot et je l'emportais sur mon mur. « Presbytère ! » Je le jetais, par-dessus le toit du poulailler et le jardin de Miton, vers l'horizon toujours brumeux de Moutiers. Du haut de mon mur, le mot sonnait en anathème : « Allez ! vous êtes tous des presbytères ! » criais-je à des bannis invisibles.

Un peu plus tard, le mot perdit de son venin, et je m'avisai que « presbytère » pouvait bien être le nom scientifique du petit escargot rayé jaune et noir... Une imprudence perdit tout, pendant une de ces minutes où une enfant, si grave, si chimérique qu'elle soit, ressemble passagèrement à l'idée que s'en font les grandes personnes...

– Maman ! regarde le joli petit presbytère que j'ai trouvé !

– Le joli petit... quoi ?

– Le joli petit presb...

Je me tus, trop tard. Il fallut apprendre – « Je me demande si cette enfant a tout son bon sens... » – ce que je tenais tant à ignorer, et appeler « les choses par leur nom »...

– Un presbytère, voyons, c'est la maison du curé.

## 【中級】日本語訳

コレット『クロディーヌの家』から「壁の上の司祭」より抜粋、金子麻里訳。

「司祭館」という言葉を、その年、わたしの敏感な耳が拾ったばかりで、この言葉のことでわたしの頭の中はいっぱいだった。

「あちらは私が存じております中で、なんといっても、いちばん賑やかな司祭館に違いありませんよ」と誰かが言っていたのだった。

「しさいかん、ってなあに？」両親のどちらかにこう尋ねてみようなどという考えはこれっぽっちも浮かばなかった。わたしは勝手にこの言葉を神秘的だと感じていたのだ、ざらざらとした浮き彫りで縁取られたような音に始まり、長くて夢見るような音節で終わるその響き・・・秘密と心もとなさで胸をいっぱいにして、わたしはこの言葉を毎晩枕元におき、夢中だった例の壁よりももっとのめり込んでいた。「しさいかん！」鶏小屋の屋根とミトンの庭から、ムティエの常にもやのかかった地平線のかなたに向かって放てば、わたしの壁の上から、この言葉は呪いのまじないとなって響き渡るのだった。「えい！お前たちみんな、しさいかんにしてやる！」空想の追放者たちに向かって、わたしはそう叫ぶのだった。

しばらくして、この言葉の持つ毒気が抜かれると、終にわたしはこんな風に思いだした、「しさいかん」は黄色と黒の縞縞の小さなカタツムリの学名であるのに違いないと・・・迂闊さは全てを台無しにしてしまうのだ、少女が、どれほど生真面目で、どれほど夢想家であれ、一時的に、大人たちが心配になるような考えに染まるほんの僅かの間に・・・

「ママ！見て、あたしが見つけたこのかわいい小さなしさいかん！」

「この可愛い小さな・・・何ですって？」

「このかわいい小さなしさいか・・・」口を噤むも時は遅し。わたしは学ばねばならなかったのだ — 「この子の頭は本当にどうかしてやしないかしら・・・」 — わたしが知らないままにいたかったことを、そして「ものには決まった名前があるの」だということを・・・

「司祭館っていうのはね、まったくこの子ったら、司祭様のお家のことを言うのよ。」

申込み・問い合わせ先

事務局：新潟フランス語スピーチコンテスト実行委員会

(新潟市国際交流協会内) 〒951-8055 新潟市中央区礎町通 3-2086

Tel : 025-225-2727 / Fax : 025-225-2733 / e-mail : kvokai@nief.or.jp



【初級】 暗誦テキスト (二人一組)

Samuel Beckett, *En attendant Godot*, Paris, Les Éditions de Minuit, 1952.

参考 : Bernard Lecherbonnier, Dominique Rincé, Pierre Brunel et Chirstiane Moatti, *Littérature. Textes et documents. XX<sup>e</sup> siècle*, Paris, Nathan, 2004, p. 654.

(赤字の部分は、暗誦する必要はありません。)

ESTRAGON. – Et maintenant il est trop tard.

VLADIMIR. – Oui, c'est la nuit.

ESTRAGON. – Et si on le laissait tomber ? (*Un temps.*) Si on le laissait tomber ?

VLADIMIR. – Il nous punirait. (*Silence. Il regarde l'arbre.*) Seul l'arbre vit.

ESTRAGON, *regardant l'arbre.* – Qu'est-ce que c'est ?

VLADIMIR. – C'est l'arbre.

ESTRAGON. – Non, mais quel genre ?

VLADIMIR. – Je ne sais pas. Un saule.

ESTRAGON. – Viens voir. (*Il entraîne Vladimir vers l'arbre. Ils s'immobilisent devant. Silence.*) Et si on se pendait ?

VLADIMIR. – Avec quoi ?

ESTRAGON. – Tu n'as pas un bout de corde ?

VLADIMIR. – Non.

ESTRAGON. – Alors on ne peut pas.

VLADIMIR. – Allons-nous-en.

ESTRAGON. – Attends, il y a ma ceinture.

VLADIMIR. – C'est trop court.

ESTRAGON. – Tu tireras sur mes jambes.

VLADIMIR. – Et qui tireras sur les miennes ?

ESTRAGON. – C'est vrai.

VLADIMIR. – Fais voir quand même. (*Estragon dénoue la corde qui maintient son pantalon. Celui-ci, beaucoup trop large, lui tombe autour des chevilles. Ils regardent la corde.*) À la rigueur ça pourrait aller. Mais est-elle solide ?

ESTRAGON. – On va voir. Tiens.

*Ils prennent chacun un bout de la corde et tirent. La corde se casse. Ils manquent de tomber.*

VLADIMIR. – Elle ne vaut rien.

*Silence.*

ESTRAGON. – Tu dis qu'il faut revenir demain ?

VLADIMIR. – Oui.

ESTRAGON. – Alors on apportera une bonne corde.

VLADIMIR. – C'est ça.

*Silence.*

ESTRAGON. – Didi.

VLADIMIR. – Oui.

ESTRAGON. – Je ne peux plus continuer comme ça.

VLADIMIR. – On dit ça.

ESTRAGON. – Si on se quittait ? Ça irait peut-être mieux.

VLADIMIR. – On se pendra demain. (*Un temps.*) À moins que Godot ne vienne.

ESTRAGON. – Et s'il vient ?

VLADIMIR. – Nous serons sauvés.

*Vladimir enlève son chapeau – celui de Lucky – regarde dedans, y passe la main, le secoue, le remet.*

ESTRAGON. – Alors, on y va ?

VLADIMIR. – Relève ton pantalon.

ESTRAGON. – Comment ?

VLADIMIR. – Relève ton pantalon.

ESTRAGON. – Que j'enlève mon pantalon ?

VLADIMIR. – RE-lève ton pantalon.

ESTRAGON. – C'est vrai.

*Il relève son pantalon. Silence.*

VLADIMIR. – Alors, on y va ?

ESTRAGON. – Allons-y.

*Ils ne bougent pas.*

*Rideau.*

【初級】 日本語訳

サミュエル・ベケット『ゴドーを待ちながら』(『ベケット戯曲全集1』) 安藤信也・高橋康也共訳、白水社、1967年、188-191頁

エストラゴン 今からじゃおそいな。

ヴラジーミル ああ、もう夜だ。

エストラゴン いっそのこと、すっぽかしてやったらどうだ？

(間。) すっぽかしてやったら？

ヴラジーミル あとでひどい目に合わされる。(沈黙。木をながめて) 木だけが生きている。

エストラゴン (木を見て) なんだい、ありやあ？

ヴラジーミル 木さ。

エストラゴン いや、だからさ、なんの？

ヴラジーミル 知らない。柳かな。

エストラゴン ちょっと来てごらん。(ヴラジーミルを木の方へ引っ張っていく。二人は木の前で動かない。沈黙。) 首をつつてたらどうだろう？

ヴラジーミル なんで？

エストラゴン 綱の切れっぱしなんかないのかい？

ヴラジーミル ない。

エストラゴン じゃあ、だめだ。

ヴラジーミル さあ、行こう。

エストラゴン 待った、おれのズボンの紐がある。

ヴラジーミル みじかすぎるよ。

エストラゴン 足を引っ張ってくれりゃいい。

ヴラジーミル じゃあ、わたしの足は誰が引っ張る？

エストラゴン ああそうか。

ヴラジーミル とにかく見せてごらん(エストラゴン、ズボンの紐の結び目を解く。太すぎるズボンはエストラゴンの足くびのまわりに落ちる。二人は、紐を眺める。) どうにか間に合うかもしれない。しかし、丈夫かな？

エストラゴン ためしてみよう。持ってみな。

二人は、おのおの紐の端を持って引っ張る。紐は切れる。二人は転びかかる。

ヴラジーミル 役に立たん。

沈黙。

エストラゴン おまえ、またあした来なくちやいかんと言ったな？

ヴラジーミル ああ。

エストラゴン じゃあ、丈夫な綱を一本持って来ることにしよう。

ヴラジーミル そうだな。

沈黙。

エストラゴン ディディー。

ヴラジーミル うん。

エストラゴン おれは、このままじゃとてもやっていけない。

ヴラジーミル 口ではみなそう言うさ。

エストラゴン 別れることにしたら？ そのほうがいいのかもしれない。

ヴラジーミル それより、あした首をつろう。(間。) ゴドーが来ないかぎり。

エストラゴン もし来たら？

ヴラジーミル わたしたちは救われる。

ヴラジーミル、帽子をとる。ラッキーの帽子だ。中を見、手を入れ、ふるってみてから、かぶる。

エストラゴン じゃあ、いくか？

ヴラジーミル ズボンを上げな。

エストラゴン なんだった？

ヴラジーミル ズボンを上げな。

エストラゴン ズボンを下げる？

ヴラジーミル 上げなよ、ズボンを。

エストラゴン ああそうか。

エストラゴン、ズボンを上げる。沈黙。

ヴラジーミル じゃあ、行くか？

エストラゴン ああ、行こう。

二人は動かない。

-幕-